民族の移動

松浦　純子

一旦、移民を受入れるとその人たちが家族を呼び寄せ、増えた移民は受入国の文化も生活も破壊してしまう。日本は少子高齢化だからといって安易に移民に頼ることなく、AI やロボットの活用を考えるべきだと主張する本を読んだ。民族の移動の歴史を振り返ると、移民問題の難しさを感じた。

歴史上多くの民族が故郷を離れ、豊かな生活を求めて移動した。古代や中世においては気候の寒冷化や乾燥化が民族移動の主原因だった。西欧では移動したゲルマン人やノルマン人が先住民を支配下に置いたり辺境へ追いやったりして国を建てた。一方、中国ではゲルマン人の移動とほぼ同じ頃、五胡が華北へ移動して建国し、占領した地の漢民族に混血をもたらした。これ以降、純粋な漢民族はほとんどいなくなったという説もある。

近代に入ると、宗教や政治が原因となって民族移動が引き起こされるようになった。インドとパキスタンの分離独立に伴う民族移動は、史上最大の移動だといわれている。インドからパキスタンへ、またその逆を目指した人々が衝突し、暴動・虐殺が起きて 1500 万人以上が難民となり、100 万人以上が死亡したとされる。また、ユダヤ人の入植・建国は多数のパレスチナ難民を生んだ。

私が民族移動の様子をテレビで初めて見たのは 10 年位前で、政情不安や紛争の続くシリア、アフガニスタン、イラクなどからドイツ国境へ歩いて向かう難民たちの姿だった。ドイツのメルケル首相は当初、「困っている人は移民として受け入れるが、あくまで一時的なもの」と考えていたらしい。しかし、難民は経済大国のドイツに行けば生活が安定すると考え、ドイツとしても第二次世界大戦中のホロコーストなどの反省から難民の定住を拒否できなかったようだ。UNHCR によると 2024 年末時点の難民の出身国は、ベネズエラ、シリア、アフガニスタン、ウクライナの順で、また受入国はイラン、トルコ、コロンビア、ドイツの順で多かった。今年はイランも出身国側に入るのではと危惧している。